

聴覚にハンディのある人を支援するアプリを開発

くさかはづき

日下葉月さん



— PROFILE —

くさかはづき(白浜区・15歳)

静岡雙葉高等学校1年生。学校では聖歌隊に所属。
休日は友人とのお出かけや趣味の動画編集を楽しむ。

聴覚にハンディのある人の「困った」を減らし、安心につなげるため、日々さまざまな体験や挑戦を重ねるのは、日下葉月さん(白浜区)。葉月さんは、聴覚ハンディのある人の暮らしをサポートするアプリを開発した。

「困った」を減らす新たな一歩

葉月さんがアプリ製作に挑戦したのは、中学2年生のとき。人工内耳を使用する友人と同じクラスになったことがきっかけだった。友人は、会話はできるものの、相手の話を正確に聞き取ることに難しさを感じていた。そんな中、授業で補聴器をつける体験をした葉月さん。想像以上に聞き取りにくく、聴覚にハンディのある人の生活には不便があることを実感した。

「聞こえにくい人が頑張っている聞くのではなく、簡単に受け取れるようにしたい」

そんな思いからアプリの製作を決意。音を文字や振動、画面表示など別の方法に変換することで、音を聞き取りにくい人でも日常生活に必要な情報を受け取れるアプリの製作を始めた。

「聞こえる」可能性を広める

アプリ開発やビジネス計画を立てることが初めてだった葉月さん。何もわからないところから学んでいくことは苦労したと振り返る。自主的に調べるだけでなく、専門家から知見を求めたり、実際にアプリを使用してもらったり、さまざまな角度からアプリを見つめ直し、何度も改善を重ねた。

また、聴覚にハンディのある人の生活を詳しく学ぶため、手話奉仕員養成講座を受講。より深く学ぶため、手話の一つの言語として尊重されているフィンランドへの留学も経験した。さまざまな学びや体験から、聴覚にハンディのある人は、学校のチャイムや周りの人の話など、音によって伝えられている大切な情報を見逃しているかもしれないという不安を感じているということを体感した。

現在は「音を誰もが受け取りやすい形で届けるアプリを目指している」と話す葉月さん。友人との出会いから始まった挑戦が、誰もが音を受け取りやすい社会をつくるきっかけになるだろう。